

子牛の誕生と死

電話の向こうから

「死なせてしまった」と硬く尖った震える声

重さと深さの中で、ことばが消える

初産だった

もう少し早く手助けをしていたら

手を尽くした後も、後悔、罪悪感、無力感が、滲み出る震える声
次々と自分を責めたてながら、死の瞬間と対峙している臨場感が
わたしの中で共振し、光景が浮かび上がる

亡くなった子牛への悲しみが、震える声が、からだの中で響き渡る
悲しい、でもね、それは防ぎえぬ事故、と何度も言葉にしつつ
生と死の狭間の危うさに捕まれていた

喜びと悲しみの裏表

いのちの誕生と死、その日常の中の深淵を、本当に気づいて生きていただろうか
この不思議な世界を、すべてのいのちのちのつながりを
何度も何度も立ち戻り、根っこへの希求として、こころの奥へ突き進む